

森のはなし

頌栄短期大学 沖中重明

つちねんど作のゆづたです



ここは神戸の東灘区、六甲山の麓、頌栄短大と頌栄幼稚園は同じキャンパスの中にあり、保育を学ぶ学生たちは日常的に幼稚園の子どもたちの活動を目の当たりにしながら学んでいます。このキャンパスに裏山があり、この森は大学の授業や幼稚園、さらには地域の子どもたちの活動に活用されています。今回はこの森の恵みを利用した頌栄幼稚園の取り組みを紹介します。

活用とは言いながらいつもは自由に立入ることのできない森です。なぜならこの森の主はイノシシなのです。秋には大量に実を落とすクヌギの木がありますが、地面一面に落ちた実を彼らは一晩で食い尽くしてしまうほどです。そのイノシシが泥浴びをする「ヌタ場」が森の中の小さな崖の下にあります。この崖から良質の粘土が採れます。

保育においても、学校教育においても、表現の活動はこどもたち一人一人の表したいという気持ちが原動力です。その気持ちを育むものは子どもたちを取り巻く環境に他なりません。時間、空間、モノ、情報、ヒトと

いった環境が子どもの感性と表現を育むのです。この森で粘土を発見した子どもたちは、この粘土を購入し与えられるものではなく、自然から授かったものとして、そして自分たちで採取し集めたものとして、大切に扱い、十分に楽しみ、最後には器の形に成型し、園庭で野焼き（縄文土器の作り方ですね）をして植木鉢をつくるというプロジェクトを成し遂げました。

子どもたちの「やってみたい」という気持ちにダイレクトに応答できる環境が提供できたことは幸運かもしれません。子どもたちが森の中で「これ本当に粘土や！くっつくで！」と歓声を上げた時、造形教育において非言語的思考を促すことの重要性を痛感したのです。



森に入る前、
「イノシシがいたらどうしよう」
「本当に粘土があるの？」



森の中をどんどん進みます



「あっ！ここ、粘土みたい！」



「いっぱい採ろうね」



幼稚園にたくさん持って帰りました。



大切に、小さな石や木の根を取り除きます。



お店に売っていない、自分たちだけの粘土です。



植木鉢の形を作ります。



園庭に円を描いて野焼きの準備。



レンガを運んで、



きれいな円に積み上がりました。

灰をたくさん作ってから粘土を入れます。
夕方まで一日、焼き続けます。





翌日、焼きあがりましたが、まだ灰の中です。



今年の植木鉢は、灰の中で酸欠気味、
還元焼成で黒くなりました。



色が黒くても自分の作品はわかります。
見つかったかな？
まだ高温なので触れません。



酸化焼成だとこんな色になります。





この花道を通して卒業しました。



森の恵みは他にもあります。

小学生たちが自然木の枝を利用して「森のランタン」を作りました。



森のお楽しみはまだあります。桜の枝に生地を塗りながら一層ずつ焼き上げるバームクーヘンは、子どもたちにも学生にも大人気です。



卒業式の絵を描いてくれました。



● 「全美協メルマガ」第8号(5月1日)は 愛知東邦大学 新実 広記先生です。